

松崎英吾



視覚障がい者と 健常者が 混ざり合う社会

PROFILE

まつぎきえいご

1979年、千葉県松戸市生まれ。国際基督教大学卒。一般企業に就職。在職中に携わっていたブラインドサッカーを通じて、社会を変えたいとの想いから退職し、日本視覚障害者サッカー協会(現・NPO法人日本ブラインドサッカー協会)の事務局長に就任。「サッカーで混ざる」をビジョンに掲げる。事業型で非営利という新しい形のスポーツ組織を目指す。2児の父。スポーツ庁・経済産業省「スポーツ未来開拓会議」委員、国際視覚障害者スポーツ連盟(IBSA)理事



障がい者スポーツのなかでも、ブラインドサッカーの普及に携わってきました。まず取り組んだのは、ビジョン(理念)を作ること。ブラインドサッカーを通じて、視覚障がい者と健常者が当たり前に混ざり合う社会を築くことを掲げました。試合に勝つことは大切ですし、競技スポーツとしての普及は大切です。ただ、競技を振興する先に、なにがあるのか? 障がい者スポーツだからこそ社会に提供できる価値もあるはず。理屈で障がい者との接し方を学ぶのではなく、体を動かしながら主体的に気づくこと、それが障がい者への理解につながります。

取り組み始めたのは、企業や個人学校に向けた体験する機会の提供です。多い時には、小学校に対し年間500件を実施してきました。参加者がブラインドサッカーの体験を通じて、障がいの理解はもろろん、信頼関係やチームワークについて再発見できる場です。それらの体験から、競技を応援してくれる人や、サポートしてくれる企業も増えてきました。

ブラインドサッカーは、フットサル(5人制サッカー)を基にルールが考案されており、障がいの程度によってブラインドサッカーと、ロービジョンフットサルの二つのカテゴリーに分かれています。ブラインドサッカー

スするきっかけになればと思います。ブラインドサッカーの普及とともに、視覚障がい者が減少していく、そのようなスポーツになれる可能性を秘めていると考えています。

ブラインドサッカーをはじめとする障がい者スポーツは、社会の多様性の理解促進や変化を生み出す力を持っています。「スポーツと開発」への注目が高まっているなか、その可能性をさらに切り拓き、「混ざり合う社会」を目指していきます。

は、視覚を閉じた状態でプレーし、技術だけではなく、視覚障がい者と健常者が力を合わせてプレーします。ロービジョンフットサルは、弱視の選手がおもにプレーします。

めてブラインドサッカーの教室も開いています。運動する機会や場が少ない参加者の子どもたちは、当初、運動能力検査を行うとAからEの5段階でほとんどが最下位のE判定でした。ところが、教室を始めて3年

インドサッカーの価値とはなんでしょう? 「ピッチでプレーしているときには障がいを忘れる」と言う選手もいます。日ごろ、街なかで不便を感じることの多い視覚障がい者にとって、ピッチの中は、みずから考え、判断し、自由に動き回れる空間です。またブラインドサッカーは、自分から声をかけてチームで戦うスポーツです。視覚障がい者は、ときに「待ちの障がい」といわれます。声をかけられるのを待つ受動的な部分があるからです。しかしブラインドサッカーは、みずから声をかける、発信をすることに始まり、負けたくないという気持ちを育むには効果的なスポーツです。

視覚障がいのある子どもたちを集

も経つとC判定まで向上する子どもたちが増えていきました。運動能力がそもそも低いわけではなく、十分な参加機会がなかったからだと考えます。また、運動能力だけではありません。団体行動をすることで、挨拶やピッチ内の声かけなど、自分から声を出して発信することができるようになり、社会的スキルの向上にもつながっています。

昨年、国際視覚障害者スポーツ連盟の理事になりました。日本でブラインドサッカーの普及に取り組んできた経験を生かして、世界でも、もっと果たせる役割があるのではないかと考えたからです。



視覚障がい児向けの事業では、サマーキャンプやほかのスポーツの体験会も開催。「楽しい」スポーツ体験が、運動能力や社会的スキルの向上につながっていく



写真提供:
日本ブラインドサッカー協会

*多様な価値観や考え方を持つ一人一人の能力や経験を活かした、個人や組織に役立つ人材開発